

# ハタチの誓い

1月8日、釜石市民ホールTETTOOで「はたちのつどい」が行われ、194人が参加しました。式では、代表抱負発表や神楽・虎舞による郷土芸能披露、市民憲章・防災市民憲章の唱和、恩師からのビデオメッセージなどが披露され、ハタチを迎える若者たちは、真剣なまなざしで今後の人生への決意を固めました。



「私達一人一人が困難に屈せずたくましく生き、前を向いて歩いていきたい」と堂々たる姿で代表抱負発表をしたのは甲子町出身の金樹さん。「大好きなこのまちに恩返しをしたい」と、自ら代表抱負の場に立った。現在は、静岡県にある常葉大でサッカーに打ち込む日々を送っている。

代表抱負発表からは、実直な姿や一本筋の通った「芯」のようなものが感じ取れた。その源はどこから来ているのか。そして彼が目指すものとは――。

金さんは6歳の時、FC釜石でサッカーを始め、中学から現在のポジションであるセンターバックとしてプレーしている。高校の進路を考え始めた時、自分自身を高められる環境で選手権大会に出場し、全国で一番を取りたいとの思いから青森山田高校へ進路を決めた。

プチームの遠征に初めて呼ばれて、やってやろうと思っていた矢先だったので、かなり悔しかったです。新人生も入ってくる時期で、焦りもありました。腐りそうになる気持ちを抑え、前を向き続けた。ライバルたちが生き生きとサッカーをするのを横目に「けがを言い訳にしたくない」という気持ちで懸命にリハビリに取り組んだ。

しかし半年間の離脱は大きく、3年生では自らが納得できる結果は残せなかった。「選手権メンバーには選ばれたものの、ピッチには立てず、本当に悔しかったです。不完全燃焼で終わった感じでした。」

大学では高校時代の悔しさをばねに、練習に対する意識も変わった。「高校の時はやらされている感じだったのが、大学では頭を使って1つ1つのプレーをするようになりました」大学2年からは学年リーダーとして、引っ張る立場にもなった。「高校までは、キャプテンとかをやったことがなく、不安な面もありましたが、チームメイトを鼓舞し、勝てるチームにすることはやりがいがあります。自分一人ではできません。自分一人では限られているため、チームワークは常に意識しています。」

その意識が実を結んでか、大学2年序盤



球際で体を張り、気迫を前面に出すプレーが持ち味 (上：高校時代 下：現在)

までは、途中出場が多かったものの、秋のリーグ戦ではスタメンで出場することが多くなった。昨年12月に行われた全日本大学サッカー選手権の初戦もスタメンで出場。PK戦にもつれる、し烈な戦いを制した。その後チームは勢いに乗り、次戦にも勝利。準々決勝で関西王者の関西学院大学に1-0で敗れたものの、全国ベスト8進出に大きく貢献した。「来年からはチームの主軸としてチームを勝たせられるように頑張りたいです。常葉大学の知名度をもっと上げたいと思います」とその視線はすでに来シーズンを見据える。

そんなストイックな彼が心を落ち着かせる場所、それが釜石だ。「高校時代に県外に出て、初めて釜石の良さを実感しました。帰ってきた時には、友人や地域の方々を声にかけてもらって、ずっとここにいたいなという思いにもなります。離れるときは寂しいけど、頭の片隅には釜石があります」発表の中でも「スポーツを通して釜石に貢献できるような日々を精進していきたい」と話した彼の心の片隅にはいつも釜石がある。

そんな故郷を愛する彼には夢がある。「プロサッカー選手になって、地元の子供たちに夢や希望を与えられるような選手になりたいです。そして、憧れの菊池流帆選手とコンビを組みたいです」。大きな夢を掲げる彼の眼には、自信と決意がみなぎっていた。金さんは今日も夢の実現のために、ボールを追いかける。

## 7305

7305。この数字は、今年参加した皆さんが20歳になるまで過ごしてきた、これまでの日々です。これまでうれしかったこと、悲しかったこと、悔しかったこと、多くのことを経験してきたと思います。そんな日々を乗り越えて、感謝と決意を胸に臨んだ式典の様子を写真で振り返ります。



①②20歳の節目に決意を固める参加者ら ③毎年恒例となった有志による虎舞発表。市内各芸能団体から15人が披露しました ④はたちのつどいで初めてとなった神楽の発表。東前太神楽所属の8人が披露しました ⑤司会を務めた佐々木優奈さん ⑥⑦の佐々木さんを含め、12人の「はたちのつどい実行委員会」。20歳の節目を飾る式典を盛り上げるため、昨年の春から恩師によるビデオメッセージの制作などを行ってきました ⑧恩師によるビデオメッセージに盛り上がる参加者ら